

現実世界と物語の言葉

——マヌエル・デ・ペドロロ『すべての駄獣たち』について

田坂 建太

1. はじめに

20世紀カタルーニャ語文学を代表する作家のひとり、マヌエル・デ・ペドロロ Manuel de Pedrolo は、1918年、スペイン北東部タラガ Tàrraga 近郊の村アラニョ L'Aranyó に生まれた。生涯をカタルーニャで送ったペドロロは、自らの母語カタルーニャ語への弾圧に屈することなく、文学を「戦闘の武器」(cina de combat) (Aritzeta 2015: 23) として1990年に亡くなるまで作品を書き続けた。カタルーニャ語文学史上最大のベストセラーとされる『出所不明のタイプ原稿』(Mecanoscrit del segon origen, 1974) をはじめ、100冊以上の文学作品を遺した多作の作家である (Ginés 1997: 127, 133; Martín 2017: 1)。また、ペドロロはカスティーリャ語 (スペイン語) の母語話者でもありながら、カタルーニャ語のみを自らの執筆言語とし、カタルーニャの言語状況に関する論稿も多く残すなど、自らの「言葉」に強いこだわりを持った作家でもあった。本稿では、その作品群の中でも高い評価を受ける小説『すべての駄獣たち¹』(Totes les bèsties de càrrega, Pedrolo 1967a) を取り上げ、その中で「言葉」がどのように作品を作り上げているのか、詳しく見ていきたい。

20世紀半ば、スペインは約3年間の内戦を経験し、その後にフランコ体制 (1939-1975) が成立した。とりわけ体制の初期には、同質的・保守的なスペイン国家の価値観を推進するため、地方主義者や左派勢力は敵視・排除された。国家の共通語としてカスティーリャ語が重視され、地方の言語と見なされたカタルーニャ語は公共の場から厳しく排除された。もっとも、ファシスト勢力が第二次大戦に敗れて以降、体制が文化的譲歩の姿勢を見せ始めると、カタルーニャ語書籍の出版は徐々に復活し、教会などの宗教的な場を中心にカタルーニャ語による地域文化の表象も黙認され始めた。1960年頃には弾圧はさらに緩和され、カタルーニャ語雑誌の刊行や

¹ 邦訳未出版。但し、田澤耕 (編訳) 『バルセロナ・ストーリーズ』(水声社1992)の72頁では、ペドロロに関する伝記的記述の中で本小説に『すべての荷物運搬用の家畜』の訳が当てられている。本稿における題は拙訳。

文化機関の設置²も許可されていた (Conversi 1997: 109-129)。しかし、出版物に対する検閲は体制崩壊後の 1977 年まで維持された。特に 1966 年の出版法改正 (「フラガ法」) までの約 30 年間、すべての出版物には事前検閲が義務化され、体制に危険と判断されたあらゆる出版物の公表は禁じられていた (Labanyi 1995: 208-213)。

内戦の勃発した 1936 年、当時精神医学に関心を抱いていたペドロロは、その勉学のためバルセロナに住んでいた。彼は青年期から一貫した左派カタルーニャ主義者であり、内戦では共和国の側を支持し、フランコ体制 (1939-1975) の成立には深い失望を感じた。内戦後に作家としての活動を始め、外国文学の翻訳にも取り組みながら、精力的に作品を執筆した。カタルーニャの文化的・政治的独立を希求し、新聞・雑誌への寄稿の中ではカタルーニャ語の地位向上を訴え続けた (Ginés 1997: 130-132; Ferré 2017: 111-115)。その政治的姿勢や作風 (思想だけでなく、作中の性的描写についても問題視された) も相まって、彼はしばしば検閲の出版不許可処分に苦しめられた。検閲のために執筆から出版に至るまで 10 年以上を要した作品の数は、実に 33 にも上る (Hout 2007: 9-12)。

本稿で取り上げる小説『すべての駄獣たち』も、フランコ体制下で執筆・出版された作品である。1965 年に執筆されたこの小説は、検閲の厳しい処分を受けることなく³、執筆の 2 年後 (1967 年) に出版されている。だが、この事実は決して作品が体制に無害なものだったことを意味しない。これから見るように、この小説はむしろ、当時のカタルーニャを寓話的に描き出し、フランコ体制を風刺・批判する作品として読まれてきた。本稿ではまず、次節 (第 2 節) でこうした既存の作品評価について概観、検討する。従来の評価においては、読者が物語世界の諸要素を現実世界の寓話として読むことで、作品の解釈が成立すると想定されている。第 3 節では、こうした評価とは異なる作品分析として、文体論的視点に立った Lorda i Alaiz (1976) の論を取り上げる。この分析を主な参照点として、小説に特徴的な代名詞の使用に着目し、物語の解釈においては小説の言語使用が大きな役割を果たしていることを示す。続く第 4 節・第 5 節では、小説と同時期に執筆された論稿「二言語主義」(Pedrolo 1967b) が明らかにする作者の言語観を参考に、文体論的分析をさらに推し進める。第 4 節では小説の語彙の特徴について、

² ペドロロもたびたび寄稿した雑誌 *Serra d'Or* は 1959 年創刊、カタルーニャの言語文化を推進した団体 *Òmnium Cultural* は 1961 年創設である (Conversi 1997: 120)。

³ 実際の検閲資料は、リエイダ大学のマリウス・トーレス研究室 *Càtedra Màrius Torres* が公開するカタルーニャ語文学デジタルコーパス *Corpus Literari Digital* (文献リスト参照) で閲覧可能である。小説は 1966 年 7 月に 2 人の検閲者による検閲を受けており、小説全体で数単語 (卑猥な語など) を削除された以外は、そのまま出版が認められている。

第5節では再び代名詞の使用について詳細に検討することで、作品の中にカタルーニャ語の復権を企てる試みが見いだせることを示し、新たな作品評価の可能性を提示する。

2. 物語の寓話的解釈：(1)従来の作品分析について

本節ではまず、この小説のあらすじを確認した上で、作品に従来与えられてきた評価について概観する。次いで、近年の研究も参照しつつ、こうした評価がどのような作品解釈に基づいてなされてきたのか検討する。

『すべての駄獣たち』は、主人公である「彼」の数日間の冒険を描く小説である。この主人公は作中で一貫して「彼」(ell)と記述され、その名前や生い立ちは一切明かされない。「彼」はtuと呼ばれる共同体の一員だが、この共同体は社会の多数を占める人々に対して差別的に扱われている。社会の支配者層である官僚らしき人々は、優生学的思想のもと、この共同体の断絶を目論んでtuの女性に不妊手術を強制している。世界にはディストピア的空氣が漂い、さらにこの世界では滑稽なほどに規則の遵守が要求されるため、非理性的な不条理も感じられる。後にも触れるが、「ディストピア」(Aritzeta 2015: 31; Martín 2017: 3; 等)、「不条理」(Lorda 1976: 248-249; Arbonès 2018: 69; 等)という語は、この小説の評価の中でしばしば用いられるキーワードである。

物語は、手術室の中で「彼」がある手術を傍観する場面から始まる。非常に粗雑で血なまぐさい手術を目の前にして、「彼」は状況を理解できず戸惑った様子を見せる。この場面の最後で、「彼」は手術台で血を流す女性が「母」であると知り、手術によって「母」が意図的に殺されたと考え、激昂する。「彼」は監獄に入れられるが、すぐにそこを抜け出し、tuの仲間が住む集合住宅に一度戻った後、「母」の遺体を探す旅に出発する。墓地を探索した「彼」は、実は「母」が生存していると聞かされ、「母」を探して闇市・売春宿・役所など様々な場所を巡る。それぞれの場所で危険な目に遭うが、その度に何とか逃走し、支配者層に対して抵抗運動を繰り広げる地下組織にも加わる。だが、「彼」が「母」を見つけることはついに無い。小説の最終章、再び集合住宅に戻ったところで、「彼」は病院への出頭命令を受ける。共同体に子孫を残すため、不妊手術を免れていた一人のtuの少女と意を決して性交する。少女に別れを告げた「彼」は再び手術室に連行され、物語は書き出しの手術室と全く同じ描写で終わる。小説は13の章に分かれており、順に0(1), 1(2), ..., 11(12), 12(0)と奇妙な番号が振られている。括弧内の数字が0に戻ることは、結末が書き出しの文の繰り返しであることと併せて、物語の円環の構造を表すとされる(Simbor 1991: 213; Munné 2006: 7; 等)。

次節以降に詳しく述べるが、共同体 *tu* の人々は他人と話す際に代名詞 ‘*tu*’ (カタルーニャ語で「君」に当たる 2 人称代名詞) を用い、その他の人々は ‘*vós*’ (カタルーニャ語で敬称として用いられる 2 人称代名詞、「あなた⁴」に近い) を用いている。小説の中では物語世界の地理的・歴史的背景はほとんど明かされず、物語の舞台はいかなる場所なのか、なぜ *tu* の人々は弾圧を受けているのか、といった疑問は謎のまま残される⁵。こうした詳細な情報の欠如は、「彼」や「母」を含むほぼすべての人物に共通する特徴である。とりわけ「母」については、「彼」自身が「私の母」(Pedrolo 1967a⁶: 39) と呼ぶ場面がある一方、*tu* 共同体の皆も「母」と呼んでおり、具体的な人物であると同時に抽象的な存在であるようにも感じられる。

Riera Llorca (1971: 202, 205-207) は、この小説を「ある民族が経験した最も危機的な時代の要約」と評している。Riera Llorca によれば、この小説は物語を通じて政治社会的含意のあるメッセージを提示しているが、そうした含意は「この国」の読者であれば容易に理解できるものであり、読者は自らが経験した迫害と抵抗の年月を物語の中に見出すだろうという。Riera Llorca の言う「この国」とはカタルーニャを、その国が受けた「迫害」とはフランコ体制による抑圧を表しており、作品がカタルーニャによる体制への抵抗という文脈から理解されていることが分かる。こうした作品解釈について Aritzeta (2015: 27) は、Riera Llorca 自身が体制に反対して亡命生活を送った作家であることを踏まえ、自らの理想とする抵抗の像を小説の中に読み込んでいると指摘する。

Simbor Roig (1991: 215-222) は、この小説が当時のカタルーニャ社会の寓話であると分析する。この小説では、登場人物の行動やそれぞれの場面が、写実主義的といえるほど具体的・緻密に描写される。Simbor Roig は、こうした描写様式を暗黒小説や社会的写実主義小説に見られる特徴と考え、そこに社会風刺の意図が見て取れると指摘する。一方で、人物や舞台の設定に着目すると、作中に人物名・地名といった固有の名はほとんど登場せず、極端に抽象化された要素によって構成されている。Simbor Roig は、こうした舞台設定の極端な抽象性を、作品が当時のカタルーニャ社会への直接的な風刺と理解されることを回避し、検閲を通過するための戦略であったと捉える。そして、こうした具体と抽象の対比を前にした読者が、自らの現実世界 (当時のカタルーニャ社会) と物語世界とを結び付け、隠された舞台設定を補うことで、作品

⁴ 本稿後半でも触れるが、実際にはより高い敬意を表す代名詞 ‘*vostè*’ が存在し、これと比較すれば ‘*vós*’ は親しみを込めた敬称である。そのため、日本語の「あなた」には一致しない場合もある。

⁵ 小説の中に明示的な説明は無いが、物語の舞台となる地域がもともと *tu* の人間の土地だったこと、何らかの理由で現在の支配者が統治するようになったことは、会話の内容などから推測できる。

⁶ 以下、『すべての駄獣たち』本文への参照については、頁数のみを示す。

の解釈が可能になると分析する。

Cramerí (2000: 84-87) は、ペドロロの別の小説『左から右へ』(*D'esquerra a dreta, respectivament*, 1978) とこの小説を比較分析し、物語の中で女性が果たす役割に注目する。Cramerí は、この小説の「母」が抑圧された tu の国 (nation) の象徴であると論じた上で、物語の描く tu への抑圧がフランコ体制によるカタルーニャ弾圧に重なることを指摘する。ここから、「母」とは抑圧されたカタルーニャそのものの象徴であると考察される。Cramerí も、作者が具体的な描写を避けて「母」という象徴を用いた動機として、検閲制度の存在を挙げ、当時の読者には物語世界と現実世界の類似性は明らかだったと指摘する。同じく検閲の存在に触れた Simbor Roig (1991: 215) の論の中でも「母」は抑圧を受ける国 (nació) の象徴であると指摘されており、両者の分析には共通点がある。

以上の三者の作品分析は、物語に描かれる tu への抑圧とその描写を読む読者の反応に注目し、読者がそれをカタルーニャの受ける抑圧と同一視することで、物語が現実世界の政治社会的文脈の中で解釈されると想定している。Munné-Jordà (2006: 6-7) や Aritzeta (2015: 29-30) による近年の議論は、読者が物語を現実世界の寓話として理解するという図式を踏襲しつつも、実際には世界のあらゆる抑圧された地域の現実引き付けて読むことも可能だと指摘する。ただし、こうした見方は「十分な分析によって」(Munné 2006: 7) 得られるものであり、両者の解釈の基本にも当時のカタルーニャの現実に対応させる読みが据えられている。

こうした解釈は、作者ペドロロの政治的見解に呼応するものと言えるだろう。既に見たように、ペドロロは生涯を通じてカタルーニャの文化的・政治的独立を主張し続けた作家であり、その作品の中に反体制的メッセージが込められていると想定することは難しくない。また、作品が執筆・出版された当時、検閲制度が存在していたことも無視できない事実である。じっさい、検閲による処分を回避するため、体制期には直接的な表現に代わって比喻・象徴が広く利用されるようになり、結果として読者の側でも、作中に隠された政治的含意を読み解く傾向が強まった (Labanyi 1995: 214) とされている。従って、ペドロロのような反体制的な作家の作品の場合、作中の描写を政治的寓意のもとで読む解釈が成立しやすい環境にあっただろう。

だがその一方で、ペドロロは著作の中で常にフランコ体制を意識した主題を提示したわけではなく、世界の不条理や人間の疎外といった、特定の地域の状況に解釈が限定されないような主題も多く扱っている⁷。事実、ペドロロと親しい間柄にあったカタルーニャ語作家の Capmany

⁷ ペドロロは 1950 年代後半から 60 年代前半にかけて不条理劇に取り組んでおり、エスリン『不条理の演劇』の中でもスペインを代表する一人として挙げられている (Esslin 2001[1961]: 281-285)。また、作家人生

(1967:59) は、書評の中で、この小説は皮肉を込めて現代の疎外された人間を描くモラリストの作品であると述べている⁸。また、Munné-Jordà や Aritzeta が示唆するように、カタルーニャ以外の地域を含む、現実世界のあらゆる抑圧された人々を描く作品と読むことも可能であろう。けれども、こうした他の主題を読み取る選択肢が存在するにもかかわらず、実際にはほとんどの作品評価の中で、物語は体制下のカタルーニャの現実と結び付けて論じられている。物語世界と現実世界とのこうした結び付きは、どのように生じているのだろうか。

この点について、上に示した多くの作品分析では、物語の描く *tu* への抑圧の描写と当時のカタルーニャが受けた政治的抑圧の実態との類似が指摘されている。敵対者を弾圧するための恣意的な法制度や秘密裡の法運用 (Aritzeta 2015: 29)、極端な官僚支配や公的役職からの差別的排除 (Cramerí 2000: 86)、ナチ的ファシズムを思わせる優生思想の蔓延と強制 (Simbor 1991: 222) などがその例だ。しかし、こうした指摘はあくまでも、小説が描写する物語内容の観察にとどまっており、読者がどのように物語世界と現実世界との類似性を認識するのか、小説のどのような仕組みがそうした認識と寓話的解釈を可能にしているのか、といった点には踏み込んでいない⁹。こうした点を検討するためには、物語世界で起こる諸事件を観察するだけでなく、作品の解釈が形成される過程に注意を向ける必要があるだろう。

このような観点から作品を考察するにあたって興味深い先行研究として、文体論的視点からこの小説の冒頭を読む Lorda i Alaiz (1976) の分析があげられる。次節では、Lorda i Alaiz の議論の中からとりわけ作中の代名詞の使用に注目した箇所を取り上げ、小説の言語的側面に着目した作品分析の意義について検討する。

3. 物語の寓話的解釈：(2)物語世界と現実世界の結びつきについて

Lorda i Alaiz (1976)¹⁰ は、文体論的視点から文学作品を解釈する方法論について論じた文章であり、『すべての駄獣たち』の分析はその具体的実践として提示されている。この中では、文

の初期に多く執筆された短編作品群にも、人間の限界状況や幸福追求、自由や孤独といった普遍的な主題が共通して見られる (Moreno 2008: 4-12)。

⁸ Cramerí (2000: 86) は、この Capmany の書評は体制下に出されたため、カタルーニャという具体的な文脈に言及できなかったのだろうと解釈する。

⁹ じっさい、作者ペドロロの政治社会的意図は「容易に理解できる」(Riera Llorca 1971: 202)、物語世界の諸描写は「明らかにフランコ体制への言及」(Cramerí 2000: 86) であり、現実世界に実在した政治的抑圧と「容易に同一視し得た」(Aritzeta 2015: 27)、といった評価が与えられる際、「容易に」「明らかに」といった表現を用いることのできる理由は説明されていない。

¹⁰ この文章は世界カタルーニャ言語文学学会 (AILLC) の講演録に収められたもので、講演は 1973 年のもの。

学的「手法¹¹」(прием)の分析を通じて、読者が作品の解釈を形成する仕組みが段階的に説明される。本節ではまず、Lorda i Alaiz によるこうした議論の一例として、主人公を指し示す「彼」という代名詞に注目した分析(1976: 245-247)を見る。

この小説は、(蒸し暑い手術室で)「窒息する。皆が窒息する。」(S'asfixia. S'asfixien tots.) という2文で始まるが、第1文では述語動詞「窒息する」の主語は明示されていない。カステールニャ語と同様、カタルーニャ語ではこうした主語の非明示は珍しいことではない(GEIEC¹² 13.3.a)。物語の流れから考えると第1文の主語は「彼」なのだが、初読の読者にはここで誰が「窒息する」のか分からない。第3文以降では手術室の様子、医師の動作などが叙述され、「彼」が初めて明示されるのは第11文「彼の近くで」(Prop d'ell)¹³である。ただし、「彼」が一つの代名詞である以上、ここで読者には「彼」が直前の文と同一の登場人物を指すように想像されるだろう(事実、第10文の主語は「外科医」であり、「外科医の近くで…」と読んでも齟齬は無い)。だが、「彼」という語はこれ以降も登場し(第17,31,34文…)、その一方で他の登場人物は常に「外科医は」「その人は」などと一般名詞で記述される。こうした扱いの差異や文脈の齟齬から生じる違和感を認識することで、読者は「彼」が単なる代名詞ではなく、一人の登場人物を指すことに気づくのだという。

Lorda i Alaiz によれば、ここでは「彼」という代名詞の文法的特性が、主人公の存在を徐々に認識させる役割を果たしており、こうした仕掛けには「読者の関心を惹く」効果がある。さらに、代名詞とは本来「誰か」を代表する語であるという性質上、その了解された「誰か」とは誰なのかという謎へと関心を向かわせる。読者は「彼」が誰なのか全く知らないのだが、それが了解された事柄かのように扱われているからだ。このように Lorda i Alaiz (1976: 246, 249) は、小説を構成する言語の文法的特徴から作品解釈の形成過程を説明している。物語の内容と寓話的な解釈に関心を向けるのではなく、その物語を形作る言語使用に注目するこうした分析は、従来の¹⁴作品評価とは異なる見方に基づいており、注目に値する。Lorda i Alaiz は、こうした分析例を提示した上で、同様の分析は続く章にも適用できると述べているものの、その実例を示してはいない。だが、この小説の中で重要な意味を与えられている代名詞は 'ell' (彼) だけで

¹¹ Lorda i Alaiz (1976) は明示していないが、この語はシクロフスキー「手法としての芸術」(Искусство как прием, 1917) から引いたものであろう。

¹² *Gramàtica essencial de la llengua catalana*. カタルーニャ研究所 Institut d'Estudis Catalans の編集によるカタルーニャ語の文法書。IEC の言語部門 secció filològica は、カタルーニャにおける言語アカデミーに相当する。本稿の参照はインターネット公開されている簡約版に拠った(文献リスト参照)。

¹³ 下線は筆者による。以下、引用文中に付した下線については同じ。

¹⁴ ただし、Lorda i Alaiz (1976、講演は1973年)の講演は、前節で紹介した先行研究の大半に先んじるものである。

はない。前節で触れたように、‘tu’‘vós’ という2つの人称代名詞もまた、物語の中では社会一般の人々と被抑圧者とを区別する呼称として、重要な役割を与えられている。そこで以下では、この2つの人称代名詞の使用に注目して、「同様の分析」の提示を試みる。

‘tu’‘vós’ はともに2人称の代名詞であり、実際のカタルーニャ語では、前者は親称、後者は親しみを込めた（例えば年長者などへの）敬称として用いられる（*GEIEC* 13.3.1.b）。両者はそれぞれ主語となると、述語動詞に特定の活用を要求する（‘tu cantes’「君は歌う」、‘vós canteu’「あなた¹⁵は歌う」）。カタルーニャ語では動詞の活用から主語が判断できる場合、主語はしばしば省かれるので、‘tu’‘vós’ の扱いは代名詞だけでなく、動詞の活用によっても表現される。

小説では、冒頭から会話の中で何度も2人称の動詞活用が用いられるが、活用の形に重要な含意があることを知らない初読の読者は、ここに特別な注意を払わないだろう。物語世界では、tuの人間は差別的待遇を受けているため、普段は正体を隠して（代名詞‘tu’を用いずに）生活している。そのため、手術室の場面や続く監獄の場面（0(1)章と1(2)章）では、「彼」は周囲の人間と‘vós’を用いて会話する。けれども、通常のカタルーニャ語において社会関係の中で‘vós’を用いることは珍しくなく、ここに違和感は生じない。2(3)章では、「彼」は共同体の仲間が住む集合住宅に行き、その中では正体を隠す必要がないため‘tu’で会話する。だが、親密な間柄で親称の‘tu’を用いることはカタルーニャ語の一般的な特徴であり、ここでも違和感が生じないだろう。つまり、代名詞や動詞活用の備える特別な意味は、小説のはじめでは読者に対して隠されているのである。

その含意が初めて明かされるのは、3(4)章の一場面だ。この章で「彼」は抑圧者の側の人間が働く集団墓地を訪れる。ここで「彼」はある見知らぬ人間と出会うが、本来であれば他人に対して正体を隠すために、この相手には‘vós’を用いるはずである。ところが、「彼」は咄嗟に‘Perdona’「すみません¹⁶」と口にする。この形は命令法2人称単数の活用（主語が‘tu’）であり、「彼」はすぐに‘Perdoneu’と2人称複数の形（主語が‘vós’）で言い直すが、相手はその言い間違いから「彼」の正体に気付く。だが、実はこの相手もtuの人間であり、「私には『君』で話しかけて良いんだよ」（*Em pots dir de tu*）と答える（77）。この‘pots’「(君は)～して良い」という語も2人称単数の形であり、ここで両者は互いが共同体の仲間であると知る。読者はここで初めて、‘tu’‘vós’の使い分けに特別な意味があると気づくだろう。しばらく後には、この相手と「彼」がともに墓地の職員に会う際、「奴ら（＝職員）の前では互いに『あなた』（‘vós’）」

¹⁵ 註4を参照のこと。

¹⁶ 直訳は「私を許せ」であり、‘tu’で会話する相手に対する命令・依頼として用いる。

で呼び合おう」と話す場面(85)もある。読者はこうした会話文を読むことで、代名詞‘tu’‘vos’の使用に、共同体への所属を示す機能があることを確信するはずだ。

この展開は、代名詞「彼」の意味を読者が理解する過程に類似している。「彼」という語は小説の冒頭から提示されているが、初読の読者はそこに注意を払わない。だが、次第にその使用の特異性に気づくことで、「彼」が一人の人物を表すことを知る。これと同様に、2人称の代名詞・動詞活用は小説の冒頭から登場しているが、はじめ読者の注意はそこには向かない。だが、‘tu’‘vos’の使い分けの特異性に気づくことで、この代名詞が果たす役割を徐々に理解するのだ。Lorda i Alaizは、「彼」という代名詞について、小説を構成する「手法」の一例として論じていた。とすれば、同様に代名詞‘tu’‘vos’の巧みな使用もまた、言語的「手法」の一つと見なせるだろう。これら2つの「手法」はいずれも、読者の把握を遅延させる(しばらく後になって気づかせる)仕掛けとして機能している。

この「遅延」は、代名詞のもつ言語的含意の把握だけでなく、その代名詞が示唆する物語世界の要素の把握にも生じている。例えば「彼」について見ると、小説の第1文(「窒息する」)で既に主人公「彼」は登場しているのだが、代名詞の含意が明らかにならない限り、読者はその存在に気づかない。同様に、この物語世界の社会構造(抑圧される側/抑圧する側)は代名詞の使用(‘tu’を用いる共同体/‘tu’を用いない人々)によって明示されるので、‘tu’‘vos’という代名詞のもつ意味が明らかになるまで、読者はこの社会構造を正しく理解できない。従って、これら代名詞の「手法」は、2種類(言語的要素・物語世界の要素)の遅延を同時に解消し、読者にこれら2種類の要素を同時に把握させる機能を帯びていると言える。

この結果として、読者は両要素の特性を一体のものと理解するだろう。事実、Lorda i Alaiz(1976: 246-247)は既に触れたように、代名詞「彼」の仕掛けの効果として、物語の主人公が了解された「誰か」を代表する人物として感じられるようになると説明していた。この効果は、「彼」という主人公の存在が「彼」という代名詞のもつ両義性と同時に把握されるために生じると説明できる。ここに並べて考えると、‘tu’‘vos’の「手法」は、物語世界の社会構造が被抑圧者と抑圧者の両者から成るという設定と、代名詞‘tu’‘vos’の使用こそが共同体への帰属を示すという言語使用の重要性とを、同時に把握させる仕組みだと表現できる。このことには、物語世界における言語使用と社会構造との間の密接な関係を認識させる効果があるはずだ。

さて、現実のカタルーニャ語において‘tu’‘vos’の扱いの差は言葉遣い(lenguatge)の違いに過ぎないが、物語の中での両者の差は、各人のアイデンティティに深く関わる言語(lengua)

の違いになぞらえて理解できるだろう。言語使用の観点から見れば、仲間内では‘tu’を、対外的には‘vós’を使い分ける被抑圧者の人々はバイリンガルであり、他方、‘vós’のみを用いる支配的な立場の人々はモノリンガルであると言える。すなわち、小説における‘tu’‘vós’の「手法」が、物語世界の言語使用と社会構造の密接な関係を強調しているとするれば、ここで読者に明示されるのは、この世界ではモノリンガルの人々こそが支配的立場にあり、対してバイリンガルの共同体は抑圧を受ける立場に置かれるということである。この構図は、カスティーリャ語のみを正統とするフランコ体制と、その体制に抑圧されるカタルーニャのバイリンガル社会という、当時のカタルーニャの言語状況と重なり合う。つまり、この物語世界の社会構造を読者が把握するとき、小説における言語使用は、この社会を当時の現実世界の再現として提示する機能を果たすのである。

前節で見た従来の作品分析においては、この小説の解釈は、物語世界のそれぞれの場面がカタルーニャ社会の寓話として読まれることで成立すると想定されていた。こうした分析の中では、物語世界の諸要素、とりわけ現実世界との類似性に注目が向けられていた一方で、読者がどのようにそうした類似性を見出すのか、両者の世界を寓話的に結び付ける解釈はどのように可能になるのか、といった点は議論されていなかった。本節では、作品の中で言語的要素の果たす役割を「手法」として分析した Lorda i Alaiz の議論を参考に、物語世界が現実世界の再現として提示される上で、とりわけ代名詞‘tu’‘vós’の使用が大きな役割を果たしていることを示した。従来の作品分析では、物語に描かれるそれぞれの場面が詳細に観察される一方で、物語を構成する言語はあくまでも分析の背景に退いていた。だが、本節では作品の言語使用を前面に取り上げることで、物語世界と現実世界の間に結びつきが成立する仕組みを分析し、作品の解釈が形成される過程を明らかにした。このことは、言語使用に着目した作品分析にも十分な意義があることを示すだろう。

次節以降では、作者自身による論稿やカタルーニャ語コーパスなども参照しながら、言語使用の側面に着目した作品評価について検討する。

4. 作品の言語的分析：(1) 専門用語について

これまで、『すべての駄獣たち』には、「バールをまとったフランコ体制批判」(Martín 2017: 3)、「ジェノサイドを描いたディストピア[文学]」(Aritzeta 2015: 31)といった評価が与えられてきた。本稿で確認してきたように、こうした評価は、物語の諸要素がどのようなメタファーを用いて現実のカタルーニャ社会を表現しているのか(「母」は抑圧されたカタルーニャを示す、「彼」の抵抗はカタルーニャの希望を表す、等)という分析に重点を置いてきた。前節では、

従来の議論が見落としてきた点として、小説を構成する言語の「手法」によって、物語世界が現実世界の再現として提示されていることを指摘した。一方、こうした現実世界との対応関係や物語の寓話的解釈をいったん保留して、小説の構成そのものに重点を置く議論も可能である。前節で触れた Lorda i Alaiz による文体論的分析はその一例と言えるが、そこでの主題は文学的「手法」に着目した作品解釈の方法論であったため、この小説自体に評価を与えるには至っていなかった。では、現実世界との対応関係に依拠せず、小説の構成そのものに注目する場合、この小説はどのように評価できるだろうか。

本稿の前半にも触れたが、この小説の大きな特徴としてしばしば挙げられるのが、物語世界の不条理やディストピア的特徴である。ペドロロと同世代の作家 Capmany (1967: 59) による書評で、この小説が現代の疎外された人間を描くモラリスト的作品と評価されていることは既に見た。Simbor Roig (1991: 219) も、この小説の描く不条理を現実世界の誇張 (hipèrbole) と分析し、その背景には不条理な世界に反抗する人間を描き出すモラリスト的意図があると分析する。また、ペドロロの作品群に見られる「不条理の世界」(un univers absurd) について論じた Arbonès i Montull (2018[1980]: 69) も、『すべての駄獣たち』における不条理は作者のそれ以前の作品よりも一層強調され、読者に世界の苦悩を感じさせることで反抗へと突き動かす効果があるとする。

Lorda i Alaiz (1976: 249) の分析では、物語世界のこうした空気を形作る要素の一つとして、0(1)章に顕著な語彙的特徴が指摘される。手術室が舞台のこの章では、医学・薬学の専門用語が大量に登場する(例えば、手術の傍観者¹⁷の言葉「それは尿管結石による右腎の膿腎症の症例で...」(9)など)。Lorda i Alaiz はこうした用語の例をリストアップした上で、専門用語の多用には、「彼」を取りまく世界に銜学の感と敵対的な空気を与える効果があると述べる。この指摘の中では言及されていないが、これも語彙という言語的性質を利用した小説の「手法」の一つと言えるだろう。

さらに興味深いのは、Lorda i Alaiz (1976: 254-255) がこうした専門用語の多用を一つの「手法」として分析するだけでなく、論文の補遺 (Apèndix) の中で、政治社会的風刺の暗号としてそれぞれの語句を読むという独自の解釈を提示している点だ。例えば、「母」(Cramerí が示すように、カタルーニャの象徴と捉えられる) にチアノーゼ(酸素の減少で肌が青くなる症状)が見られるという手術の一場面は、カタルーニャ(=「母」)社会の「風通しが悪い」こと(=酸素の減少)、カタルーニャがフランコ体制(=青=スペイン・ファシストの象徴)に苦しめられ

¹⁷ この世界の法令では、市民が手術に立ち会うことが規定されており(これ自体も「不条理」の一要素だろう)、彼らには手術後に証人として署名する義務が課せられている。

ていることの暗示と解釈される¹⁸。こうした暗号解読のような読みは、語彙という言語的側面に着目する点で、この小説に対するその他の作品分析とは異なる視点に立っている。しかしながら、小説の諸要素を現実世界のメタファーとして読んでいるという点では、物語に寓話的解釈を与える既存の作品分析と共通している。そこで本節では、ここに見た語彙の特徴への着目は踏襲しつつ、その特徴をメタファーに依拠せず分析することを試みる。

先ほど触れたように、Lorda i Alaiz (1976: 254) は 0(1)章に登場する医学・薬学の専門用語のリストを挙げている。だが、このリストは末尾が「…」と続く不完全なものであるため、本稿では一部の語彙を再検討した¹⁹上でこれを拡充し、0(1)章に登場する専門用語の一覧として以下の 115 の語句を提示する。

abscess, acetat*, àcid aspàrtic*, àcid cítric*, àcid glutàmic*, àcid hidroxiglutàmic*, aminoàcid, anestèsia, aneurisma, antihistamínic, arginina*, arteriovenós*, astènia, aurícula, auscultació, bacil de Herbert*, bursitis*, calcificació, càlcul, calicular*, caseïna*, catgut*, cauterització*, cianosi*, cirrosi, cistina*, cloramfenicol*, cocus, colitis, contractura de Dupuytren*, còrtex, cultiu, cutani, descongestió, èmbol, enzimoàcid*, espèculum, espiril*, estèrnum, estiloiditis*, felinanina*, fibril·lació, filiforme, fòrnix*, ganglió, gastroduodenal*, glicocol·la, glucocorticoide, granulat, hepàtic, hepatitis, hidrolitzat*, hidroxiprolina*, hipodèrmic, hipoproteïnèmia*, hiposaturació*, histidina*, histològic, instil·lació*, intraarticular*, intraabursal*, intubació*, iodina, isoleucina*, Kocher*, lisina*, litiasi*, l·ligament, lòbul, meninge*, nefritis, nitrogenat, orifici, osteatosi*, osteoartritis*, paranefrètic*, parènquima, periarticular*, periartritis*, pericardi*, pericarditis*, periosti*, peritonitis, piohidronefrosi*, pleuritis, pol renal*, posologia*, profenpiridamina*, prolina*, protozou, pulmonar, queratitis*, roentgenològic, saturació, sedant, serina*, subconjuntival*, subcutani, tannat*, tendinós, tendovaginitis*, tetraciclina*, tòrax, transfusió, traumatisme, triptòfan*, tuberós, úlcers, ulcerós, urogenital, uroològic*, valina*, vasoconstrictor*, ventricle, 8-metil-prednisolona*.²⁰

¹⁸ この読みは独創的で面白いが、やや恣意的な解釈のようにも思える。少なくとも、リストに挙げられたすべての単語に当てはまる解釈ではないだろう。

¹⁹ Lorda i Alaiz のリストのうち ‘nitrogen’ 「窒素」、‘virus’ 「ウイルス」などの語は、日常生活で用いられる専門性のやや低い語彙と考えられるため、本稿の一覧からは除いた。

²⁰ 下線を付したものは、Lorda i Alaiz がリストに挙げているもの。右上に * を付したものは、CTILC の「文学作品」コーパスに収録が無いもの（後述）。リストには、‘aneurisme’ 「動脈瘤」、‘pleuritis’ 「胸膜炎」などの病名、‘hipodèrmic’ 「皮下の」、‘meninge’ 「髄膜」などの身体部位に関する語、‘hidroxiprolina’ 「ヒドロキシプロリン」、‘tannat’ 「タンニン酸塩」などの化学物質名などが含まれる。なお、本文で綴り間違いや誤植

この一覧を見ると、たとえ手術室が舞台であるとは言え、小説の1つの章(0(1)章は22ページ・1万語程度)にこれだけの専門用語が使われるのは特異であると感じられる。じっさい、IEC²¹による近現代カタルーニャ語コーパス CTILC²²によれば、これら115の半数以上に当たる61の語句は、CTILC収録の「文学作品」²³コーパスには(本小説のデータを除いて)一度も登場しない用語である。このことは、一般に文学作品においてほとんど使用されない語句が、この小説の0(1)章には多く用いられていることを示している。また、本稿では詳しく立ち入らないが、この小説の中では他にも、墓地の中で骨の名前が列挙される場面(84-85:3(4)章)や、キリスト教の異端史が説明される場面(251-255,270-272:10(11)章)など、一般的でない語彙²⁴の並ぶ箇所がある。こうした事実を踏まえると、小説の最初の章における医学・薬学用語の多用は、他の小説とは明らかに一線を画した、この小説の言語的特徴の一つと考えられる。それでは、こうした特徴はどのように評価できるだろうか。

この小説の執筆から2年後の1967年、作者ペドロロはカタルーニャ語雑誌『金の山脈』(*Serra d'Or*)に寄稿した論稿「二言語主義」(*Bilingüisme*)の中で、専門的な言語使用について自らの見解を表明している。この論稿でペドロロは、当時のカタルーニャに広まっていた、カタルーニャ語を(カスティーリャ語=公的言語と対比して)私的言語と見なす考えを、「不自然」で「押し付けられた」ものと批判する。以下に示すのは、この論稿の冒頭、ペドロロが公的言語としてのカタルーニャ語の地位回復を訴える箇所だ。「一つの民族」「30年」という書き出しは、フランコ体制下のカタルーニャへの言及である。

一つの民族が30年の間に、自らの言語の公的使用を喜んで放棄することは無い。この30年間は、[...]我々が新聞・雑誌・ラジオにおいて自らの言語で意思表示ができたあの頃、その上、商店における領収書や送り状からジャナラリタット[*Generalitat*=カタルーニャ議会]による声明まで、カタルーニャの人々のためのあらゆる文書がカタルーニャ語で書かれ

等がある語句については、それぞれ正しい形に修正し、架空の薬品名と思われる語句は省いた。

²¹ 註12を参照のこと。

²² *Corpus Textual Informatitzat de la Llengua Catalana*。19世紀から現代までのカタルーニャ語による文章を収集するコーパス。文学作品4300万語、非文学作品5700万語。本稿では、コーパス Web ページ(文献リスト参照)で提供されている分析機能のみを使用した。

²³ CTILCでは、収録されたすべての文章が「文学作品 - 詩」「非文学作品 - 社会科学」のように、その性質によって分類されているため、任意の単語について分類ごとにその出現頻度を見ることができる。

²⁴ 例えば、‘cúbit’「尺骨」、‘falangeta’「末節骨」、‘alogià’「アロギ派の」、‘anatemitzat’「破門された」など。

ていたあの頃と、現在の我々とを隔てている。時は過ぎ去り、多くのものを奪っていったが、我々の言語は忘れられた訳でも、あらゆる公的文書を作成できたその適性を失った訳でもない。 [...]

もしある言語が、人間生活の内の意思疎通を伴うすべての場面における意見表明に耐え、法的・経済的・哲学的・科学的・宗教的・文学的用語による意思表示に耐え得るならば、その言語を私的表現の体系と形容することはできない。なぜなら、私的表現の体系であるとは、その体系が家庭の領域の外では十分な表現手段を持たず、従って、より適切で洗練された他の言語体系に頼らざるを得ないという、[カタルーニャ語とは]正反対の状況を意味するからである²⁵。(Pedrolo 1967b: 17)

この文章でペドロロは、ある言語が公的言語と認められる条件として「法的・経済的・哲学的・科学的・宗教的・文学的用語による意思表示に耐え得る」という例を挙げている。興味深いことに、『すべての駄獣たち』ではこうした用語の使用が次々に登場する。骨の名前(=科学的用語)の列挙やキリスト教の異端史の説明(=宗教的用語)の例のほか、1(2)章には架空の法令が長文で引用される(=法的用語)場面があり、7(8)章では「彼」と判事が実存主義論争に似た哲学議論を展開する(=哲学的用語)場面もある(31-34, 177-180, 193-196)。0(1)章に使用される医学・薬学用語も、科学的用語の一例だ。このように見ると、『すべての駄獣たち』は専門的な言語使用という観点において、論稿「二言語主義」と呼応するよう感じられるだろう。

既に見たように、1960年代には体制初期の苛烈な言語弾圧は既に緩和されていた。だが、そうした緩和は文学をはじめとする文化的分野において主に見られたものであった。科学分野において、カタルーニャ語は依然として研究の場から締め出されており、医学雑誌・アカデミー等が二言語化されるのは1970年頃以降のことである。医学用語について見ても、1936年に出版された『医学辞典²⁶』は1974年まで改版されず、この時代の飛躍的な技術進歩に取り残された状態にあった(Casassas 1985: 119; Sans 2004: 76-78, 89-91)。カタルーニャ語が公的な場から排除され、専門的な議論の道具としては時代遅れになりつつあったことこそ、「二言語主義」の中でペドロロが批判する、カタルーニャ語を「私的表現の体系」に過ぎないとする見方の広まった原因であろう。そうした時代背景を踏まえると、本節で見た小説の語彙的特徴は、カタルーニャ語が「(専門的な)用語による意思表示に耐え得る」言語であることを証明する試みと見な

²⁵ 拙訳、文中の括弧内は訳者による。

²⁶ IEC (カタルーニャ研究所)の監修のもと、医師の Manuel Corachan を中心に編集された *Diccionari de medicina* を指す。編集には6年を要し、フランコ体制成立以前の当時の医学用語の標準化に大きく貢献した(Sans 2004: 69)。

せるのではないだろうか。たとえ小説の中であっても専門用語を積極的に登場させ、専門性の高い議論や手術の場面をカタルーニャ語で描くことで、この言語が公的な言語使用に対する適性を十分に備えていることを提示するのである。

5. 作品の言語的分析：(2) 2人称代名詞について

前節では、小説の0(1)章に多用される専門用語に注目し、この作品の意義について検討した。専門用語の多用は、Lord i Alaiz (1976) が取り上げていることから見て取れるように、小説の中でも特筆すべき言語的特徴であった。こうした言語的特徴として同じく指摘できる点としては、本稿の前半で言語的「手法」として触れた、代名詞の巧みな使用があるだろう。ここでは、物語の解釈の中でも重要な役割を果たす代名詞 ‘tu’ ‘vós’ の用法について分析し、作品の評価についての検討を進めたい。

本稿の前半では、‘tu’ ‘vós’ という2人称代名詞は親称／敬称に対応すると述べたが、この説明は厳密には正しくない。実際のカタルーニャ語では ‘tu’ ‘vós’ の2種類だけでなく、‘tu’ ‘vós’ ‘vostè’ という3段階の親称／敬称が用いられるためだ。既に見たように、‘vós’ は(動詞活用上の)数によって表現される(‘tu’ は単数、‘vós’ は複数)敬称であるが、これとは別に、人称によって表現される敬称 ‘vostè’ (‘tu’ は2人称、‘vostè’ は3人称)も存在する²⁷。これらの代名詞は ‘tu’ < ‘vós’ < ‘vostè’ の順に敬意が強まるとされており、‘vós’ という「対等関係(‘tu’)と上下関係(‘vostè’)の中間」に位置し「親密さと礼儀正しさを併せ持つ」(Todolí 1998: 33) 代名詞が存在することは、カステイーリャ語には見られないカタルーニャ語の特徴である。

歴史的にはかつてのカステイーリャ語にも ‘vos’ は存在した。だが、16・17世紀頃から ‘tú’ ‘usted’ と衝突し、18世紀までには両者に吸収されたため、現在では親称の ‘tú’ (「君」にあたる)と敬称の ‘usted’ (「あなた」)のみが用いられている。一方、カタルーニャ語の ‘vós’ は ‘vostè’ と衝突しながらも、地理的周縁部を中心に使用され続けた。20世紀初頭、カタルーニャが自治権を得て独自の政府を設置すると(自治機関マンクムニタット Mancomunitat は1914年設置、州政府＝ジャンラリタット Generalitat は1931年に認可)、カタルーニャ語も公的な地位を獲得する。その際、公的場面で用いるに相応しい独自の呼称として ‘vós’ の使用が推奨され、再び広く使用されるようになった(Olmo 2011: 138-139, 146-147)。

ところが、現代のカタルーニャ語では ‘vós’ の使用が失われつつあり、とりわけ都市部を中心に実態は ‘tu’ ‘vostè’ の2段階式に近づきつつある(GEIEC 13.3.1.b)とされる。この傾向の背

²⁷ ‘tu’ ‘vós’ の関係はフランス語 ‘tu’ ‘vous’ に、‘tu’ ‘vostè’ の関係はカステイーリャ語 ‘tú’ ‘usted’ に近いとも言えるだろう。

景には、社会関係の変化によって親称の使用頻度が増した (Todolí 1998: 33-34) ことに加え、カタルーニャ語話者の大部分が併用するカスティーリャ語 ('tú' 'usted' の 2 段階) との間の言語的収束 (Osváth 2015: 133-134, 140-141) があると考えられている。特にフランコ体制下では、カスティーリャ語に支配的地位が与えられただけでなく、カタルーニャに多くのモノリンガル(カスティーリャ語話者) 人口が流入し、言語環境の変化は一層促進された (Vila 2004: 36-42)。

こうした変遷を踏まえると、'vos' という代名詞は 20 世紀はじめのカタルーニャでは高い重要性を与えられたものの、30 年代後半にカタルーニャ語が公的地位を失うと、その重要度も低下していったと推測される。さらに、1950 年代以降、カタルーニャ域外からの人口流入は顕著となり、60 年代には国内移民とカタルーニャのアイデンティティに関する議論も活発化した (Conversi 1997: 190-195)。人口構成の変化によってカスティーリャ語との間の収束が促進されれば、'tu' 'vostè' と比較して 'vos' の使用はさらに減少するだろう。じっさい、CTILC²⁸で 20 世紀以降の代名詞 'tu' 'vos' 'vostè' の使用頻度を調べると、'tu' 'vostè' の頻度は比較的安定した水準を保っているのに対し、'vos' の頻度は 1930 年代までの期間に最大であった後、フランコ体制 (1939-75) 崩壊後の時期に至るまで減少していることが見て取れる (下表参照)。『すべての駄獣たち』の執筆された 1965 年は、まさにこうした減少傾向の只中にあったのだ。

代名詞 'tu' 'vos' 'vostè' の出現頻度 (100 万語あたりの換算値)²⁹

| 年 | 1914 - 1933 | - 1958 | - 1973 | - 1988 | - 1998 | - 2008 | - 2018 |
|----------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| tu 頻度数 | 576.2 | 629.3 | 458.0 | 476.8 | 390.0 | 483.0 | 476.6 |
| vos 頻度数 | 189.6 | 125.6 | 94.3 | 37.0 | 42.3 | 49.2 | 38.4 |
| vostè 頻度数 | 117.0 | 135.0 | 104.5 | 168.6 | 89.8 | 78.0 | 86.4 |
| (全体 [万]) | (1363) | (1375) | (1056) | (1261) | (1245) | (1233) | (1259) |

本稿の前半で確認したように、この小説における代名詞 'tu' 'vos' (及び代名詞が要求する動

²⁸ 註 22 を参照のこと。

²⁹ データの年代幅は、CTILC が提供する集計機能の条件に従ったもの。人称代名詞としてタグ付けされたもののみ、綴り字の揺れなども含めて集計している。2 列目以降の開始年度は省略 (2 列目は 1934-1958、3 列目は 1959-1973 の集計であることを表す)。「頻度数」は 100 万語単位の換算値 (100 万語中、何回 'tu' 'vos' 'vostè' が使用されているかを示す)、「全体」は各年代幅のコーパス全体の語数 (単位: 万語)。年代ごとにコーパスに含まれる文章の性質も異なるため、厳密な比較を行うことはできない (主語がしばしば省略されることにも留意が必要) が、20 世紀末頃までの 'vos' 使用頻度の大きな減少傾向を確認することに支障はないと思われる。

詞の活用)の使用には、登場人物のアイデンティティを定義し、明示するという重要な役割が与えられている。物語の中でこの「手法」が機能することにより、読者は必然的に‘tu’‘vós’の扱いの違いや動詞活用の差を意識することになるだろう。また、物語世界を「彼」の視点から見る場合³⁰、同じ共同体の仲間と内々の会話をする場面では‘tu’で、仲間以外の人間が混ざった社会的な場では‘vós’で相手に呼び掛けることとなり、これは概ね実際の‘tu’‘vós’の使い分けの基準と合致する。つまり、この小説は‘tu’‘vós’の使用の実例を提示し、そこに読者の注目が向かうよう構成されていると読むことができる。

先に引用した論稿「二言語主義」の中で、ペドロロは「ジャンラリタットによる声明」を含む「あらゆる文書がカタルーニャ語で書かれていた」時代を回顧し、カタルーニャ語には公的言語としての適性があると論じている。先ほど触れたように、代名詞‘vós’は公的場面に相応しいカタルーニャ語の形成(1931年のジャンラリタット認可もこの動きの一環である)の中で重視され、社会関係の中で使用される語であった。このことを踏まえれば、‘vós’の使用の実例を物語における重要な要素として描くことは、当時失われつつあったカタルーニャ語独自の公的な言語様式を、小説の中で提示する試みと捉えられるだろう。

前節では、小説の目立った語彙的特徴である専門用語の多用に注目し、公的な場面におけるカタルーニャ語の適性を証明する試みがそこに見出せることを示した。さらに本節では、小説の中で重要な役割を帯びる代名詞‘vós’に注目し、この小説の中で、カタルーニャ語が独自に備える公的な言語様式の提示が試みられていることを指摘した。その中で参照点として取り上げたのが、作者自身によって同時期に著された論稿「二言語主義」だ。この論稿からは、フランコ体制の年月(「30年」)がカタルーニャ語の公的地位を「奪っていった」と考えるペドロロの言語観が読み取れる。この見方に照らして考えれば、この小説で提示されるカタルーニャ語の公的な使用の試みは、「体制によって奪われた」言語的地位の回復を目指す企てと評価できるのではないだろうか。

ペドロロの文学はこれまで「戦闘の武器」(cina de combat) (Aritzeta 2015: 23)、「政治への深い献身」(deep political commitment) (Ferré 2017: 108)と形容されてきた。こうした評価は主に、彼の作品の中で示される政治社会的メッセージや哲学的探究など、物語内容の解釈と意味付けを介して与えられてきた。本稿の後半で提示した議論は、物語内容だけでなく、小説を構成する言語そのものの特徴の中にも、作者の「戦闘」「献身」の痕跡が見いだせることを明らかにし

³⁰ この小説はほぼ一貫して主人公「彼」に焦点化された語りを採用する (Lorda 1976: 246-247; Simbor 1991: 219-220)。

た。生涯カタルーニャ語による著作を貫いたペドロロにとって、カタルーニャ語は戦いの「武器」であっただけでなく、それ自体が一つの「戦場」でもあったのだ。

6. おわりに

本稿では、マヌエル・デ・ペドロロによる小説『すべての駄獣たち』を題材に、小説を構成する言語に着目して作品を分析してきた。本稿の前半では、作品に用いられる言語的「手法」に注目し、小説が物語世界を現実世界の再現として提示する過程では、言語使用が大きな役割を果たしていることを明らかにした。後半では、小説の言語的特徴の分析から、作品の中に公的な言語使用の様式を提示する試みが見出せることを示し、この小説がカタルーニャ語の復権を目指す企てとして評価できることを論じた。

この2つの分析は、小説の「言葉」と現実世界との関係を、それぞれ違った観点から捉えていると言えるだろう。本稿前半の分析は、小説と現実がそれぞれ独立した世界を構築すると捉え、「言葉」は小説に内在する要素として、これを現実世界へと結び付ける役割を果たしていると考え。2つの世界を繋げることで、この小説=虚構の世界を意味付けることができるのだ。ここで「言葉」は、虚構と現実という2つの平行な世界（平面）を想像するとき、虚構から現実へと伸びる、垂直方向の線の集合体である。他方、本稿後半の分析は、小説をむしろ現実世界の一部と捉えるもので、そこで「言葉」は小説を構成すると同時に、現実世界の構成にも参加する。小説の中で試みられる言語使用は、それ自体が現実世界における言語実践に他ならないからだ。ここでの「言葉」は、虚構をも含みこむ1つの現実世界（平面）の中で、様々な方向へと伸びていく水平方向の線の集合体だろう。

ペドロロのような「言葉」へのこだわりを貫いた作家が、現実から切り離された虚構の平面で自らの世界を構築することに満足せず、現実の平面においても世界の変革を企てるのならば、その作品は垂直と水平の線が交差する立体的な場として理解されなければならないはずだ。本稿で示した『すべての駄獣たち』の作品分析は、まさにそうした「言葉」の立体的観察の一例である。

参考文献

Arbonès i Montull, Jordi (2018[1980]). *Pedrolo contra els límits*. Lleida: Pagès Editors.

Aritzeta, Margarida (2015). 'Recordant Manuel de Pedrolo, vint-i-cinc anys després: lectures de "Totes les bèsties de càrrega".' *Revista de Catalunya*, 292, 22-32.

Capmany, Maria Aurèlia (1967). 'Totes les bèsties de càrrega: una novel·la de Manuel de Pedrolo al primer

- pla de l'actualitat.' *Serra d'Or*, 9(8), 59.
- Casassas, Oriol (1985). 'El català, llengua d'expressió científica.' *Butlletí de les Societats Catalanes de Física, Química, Matemàtiques i Tecnologia*, 6(1), 119-125.
- Conversi, Daniele (1997). *The Basques, the Catalans and Spain: Alternative Routes to Nationalist Mobilisation*. Reno, NV: University of Nevada Press.
- Corpus Literari Digital (n.d.). Càtedra Màrius Torres d'Estudis sobre Patrimoni Literari Català: www.catedramariustorres.udl.cat/materials/cercador/cercador.php (retrieved 30 August, 2022).
- Corpus Textual Informatitzat de la Llengua Catalana (n.d.). Institut d'Estudis Catalans: ctilc.iec.cat/scripts/ (retrieved 30 August, 2022).
- Cramer, Kathryn (2000). *Language, the Novelist and National Identity in Post-Franco Catalonia*. Oxford: Legenda.
- Esslin, Martin (2001[1961]). *The Theatre of the Absurd: New Edition*. London: Methuen.
- Ferré Trill, Xavier (2017). 'Manuel de Pedrolo: Literature as Intellectual Engagement.' *Journal of Catalan Intellectual History*, 11, 107-118.
- Gramàtica essencial de la llengua catalana* (2021), 3 ed. Institut d'Estudis Catalans: geiec.iec.cat (retrieved 30 August, 2022).
- Ginés, Maria (1997). 'Manuel de Pedrolo: alguns aspectes de la seva vida.' *Assaig de teatre: Revista de l'Associació d'Investigació i Experimentació Teatral*, 7-9, 127-136.
- Hout, van den, Lidwina M. (2007). 'La censura y el caso de Manuel de Pedrolo: las novelas "perdidas".' *Represura*, 4, Article 1: www.represura.es/represura_4_octubre_2007_articulo1.pdf (retrieved 30 August, 2022)
- Labanyi, Jo (1995). 'Censorship or the Fear of Mass Culture.' Helen Graham & Jo Labanyi (Eds.). *Spanish Cultural Studies: An Introduction*. New York: Oxford University Press, 207-214.
- Lorda i Alaiz, Felip Maria (1976). 'Els corrents crítics de l'autonomia de l'obra literària i el problema de la interpretació última: a propòsit de *Totes les bèsties de càrrega*, novel·la de Manuel de Pedrolo.' Robert Brian Tate & Alan Yates (Eds.). *Actes del Tercer Col·loqui Internacional de Llengua i Literatura Catalanes*. Oxford: The Dolphin Book, 235-255.
- Martín, Sara (2017). 'Introduction: "Typescript of the Second Origin": Paradoxes of Catalan Literature.' *Alambique: Revista académica de ciencia ficción y fantasía*, 4(2), Article 2.
- Moreno i Bedmar, Anna Maria (2008). 'Els contes pedrolians: des de 1938 fins a 1956.' *Fundació Pedrolo*: www.fundaciopedrolo.cat/articulos/conte_moreno.pdf (retrieved 30 August, 2022).

- Munné-Jordà, Antoni (2006). 'La ciència-ficció de Manuel de Pedrolo: més que el "Mecanoscrit", però també.' *Fundació Pedrolo*: www.fundaciopedrolo.cat/articulos/ciencia_ficcio_a_munne.pdf (retrieved 30 August, 2022).
- Olmo, Calvo del, Francisco Javier (2011). 'Sobre la gramaticalización de los tratamientos nominales en las lenguas románicas: paralelismos e influencias.' *Caligrama: Revista de estudios románicos*, 16 (2), 131-153.
- Osváth, Alexandra Kathryn (2015). 'A Comparison of Pronominal Forms of Address in the Spanish and Catalan Spoken by Students in Barcelona.' *Revista de llengua i dret*, 64, 127-155.
- Pedrolo, de, Manuel (1967a). *Totes les bèsties de càrrega*. Barcelona: Edicions 62.
- (1967b). 'Bilingüisme.' *Serra d'Or*, 9(2), 17-19.
- Riera Llorca, Vicenç (1971). *Nou obstinats*. Barcelona: Proa.
- Sans i Sabrafen, Jordi (2004). *L'evolució de l'ús del català en medicina a Catalunya durant el segle XX: el llarg camí d'una bella i expressiva història*. Barcelona: Institut d'Estudis Catalans.
- Simbor Roig, Vicent (1991). "'Totes les bèsties de càrrega": la hipèrbole de la irracional quotidianitat catalana.' *Miscel·lània Jordi Carbonell*, 2, 209-222.
- Todolí, Júlia (1998). *Els pronoms personals*. València: Universitat de València.
- Vila i Moreno, F. Xavier (2004). 'El català i el castellà a començament del mil·lenni a Catalunya: condicionants i tendències.' Lluís Payrató & F. Xavier Vila i Moreno. *Les llengües a Catalunya*. Sabadell: Fundació Caixa de Sabadell, 29-51.

**Palabras de ficción y el mundo real:
a propósito de *Totes les bèsties de càrrega*,
novela de Manuel de Pedrolo**

Kenta TASAKA

El presente trabajo es una lectura analítica de *Totes les bèsties de càrrega* (1967), una novela distópica del escritor catalán, Manuel de Pedrolo (1918-1990). Es la historia de un pueblo oprimido, narrada desde la perspectiva de *ell* (él), protagonista inescrutable, el cual recorre un mundo lleno de hostilidad, marginación, y absurdidad. Reflejando las ideologías catalanistas del autor, la novela goza de la fama de ser una alegoría del franquismo que impulsa a la rebelión de los lectores.

Este trabajo, en primer lugar, repasa las lecturas ya existentes, la mayoría de las cuales se cimentan en la noción de enlace entre el universo narrado y el mundo real. Al entender que es este enlace lo que permite la comprensión alegórica de la historia, más destaca la falta de estudios sobre el mecanismo de enlazamiento. Por este motivo se lleva a cabo un análisis estilístico, para comprobar que el enlace interpretativo se establece en virtud de ciertos recursos lingüísticos aplicados en la obra.

Después se pasa a la exploración de una nueva lectura, siguiendo la vía de la estilística, por medio de la observación de los vocablos médico-farmacéuticos y de los pronombres personales; dos rasgos distintivos lexicales de la obra. Con citas del mismo Pedrolo, de uno de sus ensayos respecto a la circunstancia bilingüe de Cataluña, se demuestra que el lenguaje empleado en esta novela está en concordancia con la ideología lingüística del autor: el catalán debe ser la lengua pública de Cataluña.

Como conclusión se pone de relieve la doble función que desempeñan las palabras componentes de la novela, que la enlazan con el mundo real, al mismo tiempo que a este lo pretende transformar.